

## 都市的生活様式の特質

倉 田 和 四 生

はじめに

- 〔1〕 ウェーバー、ゾンバルト、ジンメルの都市観
  - 〔2〕 デュルケームのアノミー論
  - 〔3〕 都市化と社会解体論
  - 〔4〕 ワースのアーバニズム論
  - 〔5〕 ショーバークのワース批判
  - 〔6〕 コックスの現代都市論
- む す び

はじめに

日本でも都市部人口がすでに7割をこえた。われわれは、いまや都市化社会に生きている。6千年もの歴史の中で、都市は前産業型から産業型へと変化しているが、同時に、都市として変らない特質も備えているはずである。都市化時代に生きる人間として、改めて、現代大都市の特質を問うことは、きわめて重要な時代の要請であるといえよう。

19世紀に入ると、工業化の進展にともなって都市化がすすみ、大都市が形成されるようになってきた。大都市は時代の進歩発展の象徴であると同時に、また、あわれなルンペン・プロレタリアの集積する問題の場所でもあった。

マルクスやエンゲルスは、これを資本主義体制のもつ矛盾が必然的に生みだすものと考え、体制の変革を提唱した。

いく人かのすぐれた社会学者もまた工業化にともなう大都市の出現に関心を示し、その特質を興味深く論じている。その中で、特に、すぐれたいくつかの洞察について検討してみよう。

### 〔1〕 ウェーバー、ゾンバルト、ジンメルの都市観

社会学的にみると、近代以前の都市と現代の大都市と間には、社会関係についての大きな違いがみられる。すなわち、近代以前の都市では、面識の関係が成立し、入格的な結合が可能であったのに対して、現代の大都市では、もはや、それが期待できない。今世紀初頭のドイツの社会学者たちはこぞってこの点を指摘している。

M. ウェーバーはその都市類型論のなかで、都市を ①一つのまとまった集落、②比較的大きな人口をもつ、③大部分の人が農業以外で生計を立てているところ<sup>1)</sup>、と定義しているが、さらに社会学的には都市の特質は「住民相互の間の人格的対面的な知合関係が欠けている」<sup>2)</sup>と述べている。すなわちウェーバーにおいても、都市は町や村と違って、対面的な人間関係が成立し難いところである。

また、W. ゾンバルトも都市的居住様式の特質を「自然にさからうかたちの居住、(中略)自然的な所与の諸条件を人為的に支配し統制する」<sup>3)</sup>生き方であると規定している。さらに総合的な都市概念として「住民がもはやお互いに顔みしりになっていないところの、居住形態」<sup>4)</sup>としてとらえている。これは、ほぼ、ウェーバーの見解と一致するものであるといえよう。

G. ジンメルは1903年に発表した「大都市と精神生活」の中で都市生活について述べている。これによると、①大都市は刺激の強い環境であり、人と物の集中が刺激を頂点にまで高める。②刺激の強い環境に生きるため、人々は理知的にならざ

1) ウェーバー 余宮道徳訳「都市の概念と諸範疇」、鈴木広訳編『都市化の社会学』第1章、誠信書房、4頁。

2) 同上、4頁。

3) ゾンバルト 吉田裕訳「都市的居住」、鈴木広訳編『都市化の社会学』第2章、誠信書房、40頁。

4) 同上、41頁。

るをえない。③さらに、強い刺激の中に生きていくためには自己防衛のメカニズムが作られる。これが自制である。これは刺激に対する反応を抑えることであり、これによって「飽きの態度」が形成される。④近代精神は合理的で計算的になっていく。これは貨幣経済と結びつき、大都市は貨幣経済によって支配されるようになる。⑤小さい町は狭量で偏見をもつが、大都市の人は自由である。⑥小社会ではお互いに熟知しあうことが避け難いものであるが、大都市では知らない購売者のために生産している。双方の利害関係は匿名性によって処理される。⑦近代文化の特徴は客観精神が主観精神より優越しているため、個人は客観的文化の異常な発達に対処できなくなり、個人は諸力の組織のなかの単なる歯車となっている<sup>5)</sup>。

ジンメルの大都市論は、やがて、パークやワースを通して、アメリカのアーバニズム論に強い影響を与えることになる。ことにワースのアーバニズム論はジンメルに負うところが多いといわれている。

R. デューイはアーバニズム論を比較検討したなかで、ジンメルについては、①分業、②時間の厳守、③飽きの態度、の三つをあげている<sup>6)</sup>。

ジンメルの大都市論は、必ずしも体系的に論じられていないうらみはあるが、きわめて鋭い洞察を含んでいる。

さて、ウェーバー、ゾンバルト、ジンメルという今世紀初頭のすぐれた社会学者がともに、大都市の社会学的本質を鋭く捉えていることに注目してきた。三者はいずれも大都市の社会関係は、もはや、人格的な関係ではなく機能的な関係に変わったこと、そしてそのことが、都市生活の「自由」、「匿名性」と結びついていることを指摘している。

## 〔2〕 デュルケームのアノミー論

デュルケームはその著「分業論」のなかで「機械的連帯」と「有機的連帯」を区別し、分業の発

展が「有機的連帯」を生み出すことを説いた。しかしながらすべての分業が有機的連帯を生み出すわけではない。むしろ分業は解体と崩壊をもたらす可能性をもっている。分業は、無規制的であるから、連帯を生み出すためには、規制する必要がある。すなわち「有機的連帯が存在するためには、相互に相手を必要とし、そして一般的にその連帯性を感じている諸器官の体系が存在するだけでは十分でない。これら諸器官が協同しなければならぬ様式が、あらゆる種類の遭遇の機会においてではなくとも、少なくとも最も頻繁に起る情況において、予め確定されていることが、なお必要である」<sup>7)</sup>。このようにして分業の発展は規制によってはじめて連帯を生み出すわけである。

分業における「規制」の重要さと「無規制状態」(アノミー)の概念を提起したデュルケームは「自殺論」のなかでは、さらにアノミー概念を発展させ、自殺の類型のなかに「アノミー的自殺」を加えている。

「経済的危機が自殺的傾向に促進的な影響を及ぼしていることはよく知られている」<sup>8)</sup>が、「繁栄をもたらすような歓迎すべき危機でさえ、経済的破綻となら変わりのない影響を自殺におよぼす」<sup>9)</sup>という問題を追及していったデュルケームは、自殺の「真の理由は、それらの危機が危機であるから、つまり集合的秩序を揺るがすものであるからなのだ」<sup>10)</sup>と考える。このような状態は「こうしていったん弛緩してしまった社会的な力が、もう一度均衡をとりもどさないかぎり、それらの欲求の相互的な価値関係は未決定のままにおかれることになって、けっきょく、一時すべての規制が欠如するという状態が生まれる」<sup>11)</sup>これがアノミーの状態である。この状態では「人々はもはやなにが可能であって、なにが可能でないか、なにが正しくて、なにが正しくないか、なにが正当な要求や希望で、なにが過大な要求や希望であるかをわきまえない。だから、いきおい、人はなに

5) ジンメル 松本通晴訳「大都市と心的生活」、鈴木広訳編『都市化の社会学』第4章。

6) R. Dewey, "The Rural-Urban Continuum," *American Journal of Sociology*, 1960, pp. 60—66.

7) デュルケーム 井伊・寿里訳『分業論』(下) 164頁。

8) デュルケーム 宮島喬訳「自殺論」、中央公論社『世界の名著47』195頁。

9) 同上、198頁。

10) 同上、201頁。

11) 同上、211頁。

にたいしても見さかいなく欲望を向けるようになる」<sup>12)</sup>。このように欲望の自己増殖がはじまると、遂に伝統的な諸規制は効力を失う。デュルケームはこれについて「欲望にたいして供される豊富な餌はさらに欲望をそそりたて、要求がましくさせ、あらゆる規制をたえがたいものとしてしまうのであるが、まさにこのとき、伝統的な諸規制はその権威を喪失する」<sup>13)</sup>。このような無規制の状態を彼はアノミーと呼んだ。

このようにして、人々が自制心を失わない欲望を無限に増大させるためにアノミーは生まれるのである。そこで自制心はどのようにして養われるのか。これについてデュルケームは「貧しさ」の役割を強調する。すなわち「貧しさは、人々にたえずみずから規律を課すようにし、集合的規律に従順に受けいれる素地を用意させる」<sup>14)</sup>ものである。これに反して豊かさは個人の欲望を刺激してアノミーをつくり出すという。すなわち「それに反して、豊かさは、個人を刺激して、背徳の因ともなるあの反抗心をめざめさせる危険をつねにはらんでいる」<sup>15)</sup>。デュルケームは豊かな社会の病弊をするどく捉えていたといわねばならない。

ところで、このようなアノミーの状態は商工業の世界、すなわち大都市の中においては慢性的状態となっているという。すなわち「現実にはアノミーが慢性的状態にあるような社会生活の領域がある。商工業の世界がそれだ」<sup>16)</sup>さらに「社会のその部分（商工業の世界）を支配している沸騰状態、またそこから他の部分に波及していく沸騰状態は、以上のようにして生じる。つまりそれは、危機とアノミーの状態が、そこに不断に存在し、いわば常態になっているからである」<sup>17)</sup>。

すでに述べたように、デュルケームのアノミー論は伝統的規制が産業化によって権威を失ない、遵守されなくなったために生ずる混乱状態であり、それが病理を生みだすことを指摘したものである。そしてその病理は大都市に常態としてみられるものであった。

### 〔3〕都市化と社会解体論

ヨーロッパ（ドイツとフランス）の社会学者の都市観についてふれたが、次にアメリカの社会学者の大都市観について検討してみよう。アメリカの都市社会学という場合、まずシカゴ学派をとりあげなければならないであろう。

デュルケームは、社会の無規制状態が病理を生みだす一つの原因であるとみたが、その原因は「産業化」にともなう欲望の自制が失なわれるところにあるとした。

#### （1）アメリカの都市化

アメリカのシカゴ学派は、シカゴ市の病理をやや違った角度、すなわち「都市化」という角度から考察した。当時のシカゴ市における都市化には二つの大きな流れが存在した。一つは南部からの黒人の流入であり、他はヨーロッパからの移民の流入である。

20世紀の初頭までは、黒人の約9割は南部にとどまっていたが、産業化の発展にともなう、東部・北部・西部へと移動を始め、1960年には、南部の黒人は5割以下になった。黒人を移動させた吸引力は産業化の発展、第1次大戦前後の軍需景気、白人労働力の不足などからみ合ったものである。シカゴに移住したこれら黒人の大部分は、未熟練の労働者であり、ブラックベルトと呼ばれる黒人居住区に住み、独自の生活様式を維持していた。

他方、ヨーロッパからの移民は、メイフラワー号によって移住した清教徒以来、1840年ごろまでは、ほとんどが英語を話す人々で、年平均1%以下の割合であったため、アングロサクソンの支配体制を、ゆるがすことはなかった。第2期（1840—1880年）に入ると、アイルランド、ドイツ、スカンジナビアが多く、宗教的にはローマン・カトリックが多かったため、プロテスタント支配に少なからぬ影響を与えていくことになった。さらに第3期（1880年以降）に入ると、イタリア人、ポ

12) 同上, 211頁。

13) 同上, 211頁。

14) 同上, 213頁。

15) 同上, 213頁。

16) 同上, 213頁。

17) 同上, 215頁。

ーランド人、ユダヤ人およびバルカンの諸民族が大量に流入してきた。やがて、これらの多様な、人種の大量な流入は、先住民の既得権をおびやかすものとされ、移民の制限が論議されるようになった。

このような多様な背景をもつ移民やその子供たちは、移住後も、さまざまな組織をつくり、自らの言語と文化を維持しつづけた。

黒人と移民の社会はマイノリティ・グループとして独自のサブカルチュアを保持したが、これらの多様な文化は支配的文化と矛盾するため、都市の文化は秩序を失ったかに思われる。

さらにこのような混乱した社会的状況に拍車を加えたものは1920年代と30年代の経済恐慌であった。シカゴ学派の都市理論には、このような事情が強く働いている。

## (2) パークの社会解体論

タマスは社会解体について、社会的規制がグループのメンバーに対して次第に影響力を低下させている状態<sup>18)</sup>と考えているが、パークによれば社会解体は次のようにとらえられている。「もとの文化の権威と影響力および社会統制のシステムは根底からくつがえり、しだいに破壊される過程はタマス——個人の側からみられた——によって、「個人化」のプロセスと述べられている。しかし、社会やコミュニティの観点からみると、それは社会解体である」<sup>19)</sup>。

ところでこのような解体はどのようにして生まれるのであろうか、パークはこれについて「偉大な都市の発展と機械産業によって、家族、近隣、地域、ローカル・コミュニティなどに代表される古い型の社会統制は根底からおびやかされ、その影響は急速に衰退した」<sup>20)</sup>と考えている。すなわち「産業化と都市化」によって社会統制がゆらぎ、社会解体が生まれるとみている。

特に、パークたちは都市化・人口移動に焦点を

すえて考慮している。

すなわち「国のある地域から他の地域への人口の移動——たとえば現在進行しているニグロの北部への移動——は攪乱的な影響をもっている。そのような移動は、移民自身の観点からみると、新しい経済的・文化的機会をふやす開放性をもっている。にもかかわらず移動はあとにのこされたコミュニティにも、今から入っていくコミュニティにとっても社会解体をもたらす。移動は同様に移動してきた人びとと自身、さらにつけ加えると、若い世代に対して頹廃をもたらす」<sup>21)</sup>ものである。

さらに「北部の都市のニグロ・コミュニティのなかで現在、知られている少年と成人の途方もない数の非行は、全部ではないにしても、その一部は、国内移住者がかかなり違った新しい環境に、すぐには適応できないという事実によるもの」<sup>22)</sup>と考えられる。

このようにして大都市は社会解体の場となる。すなわち「実際、大都市の商業地区のすぐまわりの老朽化した住宅、貧困と売春、犯罪がうずまくところに、不断に成長するスラム地区は社会的廃棄物の集り」<sup>23)</sup>となっている。シカゴ学派は「社会解体を促進する要因として「都市化」に注目し、その実態を明らかにしたが、「社会解体」の理論の構成についてはデュルケムのアノミー論に類似したものとなっている。

パークはこのような「社会解体」の内的原因をC. H. クーリーにならって、人間接触状態の変化とこれに対応する社会統制のあり方に求めている。すなわち「都市輸送や通信の近代的手段など——たとえば、電車、自動車、電話、ラジオなど——は、最近の間に、現代都市の社会組織や産業組織に、知らず知らずのうちに急速な変化をもたらした」<sup>24)</sup>。そして「こうした変化の全般的な特徴は、都市の発達がコミュニティにおける個人の結合に見られる直接的、対面的、「第1次的」関

18) W. I. Thomas, *Social Disorganization and Social Reorganization*, in *The Polish Peasant in Europe and America*, New York, Alfred Knopf, 1927.

19) パーク 大道・倉田訳『都市』106頁。

20) 同上, 105頁。

21) 同上, 106—107頁。

22) 同上, 107頁。

23) 同上, 107頁。

24) 同上, 23頁。

係を、間接的、「第2次的」関係に移行させたという事実によって示されている」<sup>25)</sup>のである。そして「触覚や視覚というような肉体的接触は、最も基本的な人間関係にとっての基礎であり、このような関係は小規模なコミュニティのなかに事実上、包括されている」<sup>26)</sup>のであり、「このようなコミュニティの構成員の間に行なわれている相互作用は、即時的なものであり、また思慮を要しないものである。ほとんどのつきあいは、本能だとか感情だとかの範囲内で処理されている」<sup>27)</sup>。したがって「社会統制というものも、個人的影響や公衆感情への直接的な対応として、ごく自然に行なわれている。こうした社会統制は、理性的、抽象的原理の公式化というよりも、むしろ個人的適応によって行なわれているものである」<sup>28)</sup>。ところが他方、大都市では「第1次的集団の親密な関係は弱められ、またそれにもとづいている道徳的秩序もしだいに崩壊」<sup>29)</sup>している。

すなわち「都市生活によってもたらされたこうした条件では、個人や個人の集りである集団の相互間には同感や理解がまったく欠けている」<sup>30)</sup>。したがって「こうした条件のもとでは、社会統制の条件は著しくかわったものになり、したがって統制の困難性も増加している」<sup>31)</sup>。このような統制力の低下を補うものとして新しい形式の統制がつくられる。すなわち「これまで規範にもとづいて行なわれていた統制が、成文法にもとづき統制にとってかわられたということである。この変化は都市環境における個人の結合様式において、第2次関係が第1次的関係にとってかわりつつあるという動向に対応するものである」<sup>32)</sup>。

以上の考察から明らかなように、デュルケムの

アノミー論とシカゴ学派の社会解体論は実質においてほとんど同一の現象を意味している。両者の違いはデュルケムが、アノミーと自殺の関係を究明したのにたいし、シカゴ学派は社会変動との関連で、解体と社会統制を究明していることである。

### (3) 社会解体論の批判

さて、シカゴ学派の解体理論は学界に強い影響を与え、無批判的に受入れられてきたが、いくらかの有力な反証があげられている。例えば、

① アクセルロッドによるデトロイトの実証的な調査は、住民の大多数がフォーマルなグループに加入しており、その参加も無秩序ではなく、構造化されていることを示している。またインフォーマルな集団結合はきわめて普遍的な現象であることを実証した<sup>33)</sup>。

② W. F. ホワイトの街角のギャングの研究は、イタリアン・スラムにおける少年たちの社会的結合を如実にえがき出しており、都市が解体地域でないどころか、スラム地域においてさえ極めて強固な社会的結合が存在することを示している。また、グレーザーやガンスの研究もこれと同じ方向を示している<sup>34)</sup>。

③ W. H. ホワイトは都市の人間が、組織のなかに生きている姿をえがき出している<sup>35)</sup>。

④ オスカー・ルイスはレッドフィールドと同じメキシコ郊外の都市化過程の研究によって、都市化が必ずしも「社会解体」ともなうことなく進行することを実証した。<sup>36)</sup>

⑤ さらにエルトン・メイヨーやレスリス・バーガー等の産業組織におけるインフォーマル・グループの再発見も、シカゴ学派の社会解体論の反

25) 同上, 23頁。

26) 同上, 24頁。

27) 同上, 24頁。

28) 同上, 24頁。

29) 同上, 24頁。

30) 同上, 28頁。

31) 同上, 28頁。

32) 同上, 29頁。

33) アクセルロッド 鈴木広訳「都市構造と集団参加」, 鈴木広訳『都市化の社会学』219頁。

34) William F. Whyte, *Street Corner Society*, University of Chicago Press, 1943.

N. Glazer and D. P. Moynihan, *Beyond the Melting Pot*, The M. I. T. Press, 1968.

Herbert J. Gans, *The Urban Villagers*, Free Press, 1962.

35) William H. Whyte, *The Organization Man*.

36) Oscar Louis, "Urbanization without Breakdown: A Case Study, *Scientific Monthly*, 75, 1952, pp. 31-41.

証となっている<sup>87)</sup>。

以上、いくつかの研究例は、いずれもシカゴ学派やワース等が過度に強調した社会解体論が、決して都市一般の特徴ではないことを示している。シカゴの町を社会調査の実験場として選んだシカゴ学派の学者たちにとって、無数の人種がそれぞれの文化に執着して他をかえりみず生活していく姿や、得体もしれない社会病理現象は、全体として、なんらの秩序もなく社会的つながりのないものに映ったのはある程度無理からぬところであったかもしれない。しかし、サブ・カルチュア<sup>88)</sup>の存在や社会病理現象の出現それ自体は、社会解体ではない。むしろサブ・カルチュアの存在自体、マイノリティ・グループが支配的文化の中で、社会生活を維持するための防衛機能であり、その内部には強固な社会的連帯が存在するはずである。シカゴ学派にはシカゴ市の捉え方においてすら、サブ・カルチュアの存在と社会解体の混同があった。ましてこのような見方が都市一般に通じる理論でないことも明白である。

#### 〔4〕 ワースのアーバニズム論

L. ワースの論文「都市的生活様式」はアメリカの社会学界において最もよく引用される論文とされているが、ワースはこれの中で、ジンメルにならって、アーバニズムについて、きわめて詳細に論じている。次にワースのアーバニズム論をとりあげてみよう。

##### (1) アーバニズムとルーラリズム

パークやパーゼスが都市化を都市への人口の集中と分布という見地から捉えたのに対して、ワースは都市化をもっと広く「都市的生活様式」すなわち社会学の観点から捉えた。

生産様式という観点からとらえるところから、都市的生活様式は必ずしも行政的都市の範囲に必ずしも限定されない。すなわち、「現代の世界を都

市的(urban)というる程度は、都市居住の全人口の比率で、十分に、ないし正確に測定できるわけではない。都市が人間の社会生活に対してあたえた影響は、都市人口の示す比率より大きい。なぜなら都市は、いよいよ現代人の居住地と職場になってくるからだけではなく、経済的・政治的・文化的生活の主導的・統制的中心地であって、世界のさいはてのコミュニティ(Community)さえその軌道にのせ、多様な地域、国民、および活動をひとつの宇宙におりこんでいるから」<sup>89)</sup>である。このように都市的生活様式は都市を中心にその周辺に強い影響を与えているものであって、これを都市のみに限定することはできない。

次に近代的な都市の様式と前近代的な村落の様式との関連性という点についてみると、都市は歴史的に形成されてきたものであるから、当然、かつて支配的であった様式を残しているはずである。さらに都市人口は、周辺の農村人口によって補充されているところから、前近代的な様式が温存されることになる。これについてワースは「都市は即時的な創造の産物ではなく、成長の産物であるから、都市の生活様式にあたえる影響はかねて支配的であった人間結合(human association)の様式を完全に抹消しえなかったにちがいないと思われる。だからわれわれの社会生活には昔の民族社会(folk society)の痕跡、つまり農場、マナ(manor)、村という集落の特徴的な生活様式が、多かれ少なかれ、のこっているのである。都市自体の人口がか、なりの程度まで、地元から補充されているという事情はこの歴史的な影響をつよめている。そこでは、この初期的存在形態をしるべき生活様式が存在している」<sup>90)</sup>と述べている。

そこで都市的生活様式と農村型は不連続の断絶ではなく、むしろ連続しており、現実の都市は両極の間のある点に位置づけられるものと考えられる。彼は「だから、われわれはパーソナリティ(personality)の都市型と村落型とのあいだには、

37) E. Mayo, The Human Problems of an Industrial Civilization, 1933.

E. Mayo, The Social Problems of an Industrial Civilization, 1945.

E. Mayo, The Political Problems of an Industrial Civilization, 1947.

F. J. Roethlisberger, Management and the Worker, 1939.

38) L. ワース、高橋勇悦訳「生活様式としてのアーバニズム」鈴木広訳編『都市化の社会学』第6章、128頁。

39) 同上、128—129頁。

断絶した不連続の差異があると考えてはならないのである。都市と農村とは二つの極であって、そのいずれかとの関係において人間の集落は形成されるとみてよい<sup>40)</sup>と述べている。このような考え方がいわゆる「都鄙連続体説」といわれるものである。

## (2) 都市の社会学的定義

ワースはアーバニズムの諸要因を選出するため、まず、都市の定義をおこなっている。その定義のねらいは「すべての都市——少なくともわれわれの文化における都市——が共通にもっている本質的な性格を意味しなければならないだけでなく、諸都市の相違の発見に役立たなければならない<sup>41)</sup>」ものである。また定義の範囲としては「社会学的定義はこれらのこととなった型の都市が社会的実在としてどんな本質的な性格を共通にもっているかということを含めるに十分な包括的でない限りは明らかであるが、しかしそれは、上にのべた多種多様な類型にふくまれている相違を細大もらさず考慮するほどに詳細をきわめるわけにはゆかない<sup>42)</sup>」のである。そこでいろいろな都市の性格のうちで、とくに重要ないくつかのものが定義の中に取り入れられる。

次に都市を定義する場合、産業主義や近代資本主義との混同をつよく警戒している。すなわち「都市の定義をあたえる場合、生活様式としてのアーバニズムを、特殊地域的な、あるいは歴史的に拘束をうけた文化的影響と同一視しないよう注意する必要がある。……とくに大切なのはアーバニズムを産業主義(industrialism)や近代資本主義(modern capitalism)と混同する危険に注意することである。近代における都市は、たしかに近代の電力機械技術、大量生産、資本主義的企業とは別個に発生したのではない。しかし、前近代の都市が前産業的・前資本主義的秩序のもとに発達した点で今日の大都市とはちがっているもの

の、それでも都市にはちがいないのである<sup>43)</sup>と述べている。

このようにして彼は「社会学上の目的のためには、都市は社会的に異質的な諸個人の相対的に大きい・密度のある・永続的な集落である<sup>44)</sup>」と定義する。この定義によってアーバニズムの理論が構成される。

## (3) アーバニズムの理論

### 1) 人口の大きさ

まず第1に人口のサイズが大きくなることによって人種や職業および生活様式が多様になり、人種、経済的・社会的地位、趣味・嗜好に応じて空間的凝離(segregation)が生じる<sup>45)</sup>。そしてここでは親族や近隣の紐帯は弱まり、共同感情は弱まっていく。民族社会の連帯(solidalty)にかかわって競争と公的統制がなされる。

次に重要なことは、都市の社会関係の性格が小人数の村や町とは異っているということである。ウェーバー、ゾンバルト、ジンメルのところでも述べたように都市においては、住民の相互認知が欠如している。人口の増大は匿名の世界を創り出す<sup>46)</sup>。

さらに都市の世界における社会関係は接触の仕方においても村の社会関係とは異なっている。自から欲求を充すため、都市の住民は村の住民より多くの人々とかかわりをもっているし、非常に多くの集団に所属しているが、かれらは特定の人に全面的に依存することなく、そのかかわり方は断片的なものである。都市の接触はインパーソナルであり、皮相的であり、一時的である<sup>47)</sup>。

このような性格をもつ都市の社会関係の中で生活する個人は「親密な集団のパーソナルで感情的な統制からある程度の解放と自由とをかくとくするが、他方では主体的な自己表現、モラル(morale)、統合的な社会における生活のなかから生まれる参加の感覚などを失ってしまう<sup>48)</sup>」ことにな

40) 同上, 129頁。

41) 同上, 131頁。

42) 同上, 132頁。

43) 同上, 132—133頁。

44) 同上, 133頁。

45) 同上, 135頁。

46) 同上, 135頁。

47) 同上, 136頁。

48) 同上, 136頁。

る。これはデュルケムのいうアノミーであるという。

最後に、分業の成立とそれによって発展する職業の専門化も都市の大量の人口をもとに成立している<sup>49)</sup>。

## 2) 人口密度

デュルケムが述べているように、密度が増大すると、分化と専門化を生み出す傾向がある。密度は人間の活動を多様化し、数量の効果を発揮する。密度の高まりによって物理的接触は頻繁になされるが、社会的接触は疎遠になり、経済的利益をめざす空間を得るための競争はげしくなる。また、事業所の付近は居住目的には好ましくなくなるため職場と居住が分離する<sup>50)</sup>。

密集している人々は、かれらの要求と生活様式が矛盾対立するため、労働の場所と性格、収入、人種の・民族的性格、社会的地位、慣習、趣味、嗜好、偏見などになって凝離する。都市にはモザイク的な凝離がみられる<sup>51)</sup>。

また感情的・情緒的紐帯を欠如している人々が密居生活をしていると、競争、勢力強化、相互搾取などを高揚させる。そこで無秩序の状態をさけるために、公共的な統制が行使される。

さらにいろいろな習慣をもつ人々の頻繁な日常運動は軋轢と焦躁を生み出す。そしてこのようなパーソナルな欲求不満から生まれる神経的緊張はさらに強められていく<sup>52)</sup>。

## (4) 異質性

多様なパーソナリティのあいだの社会的相互作用はカストを崩壊させ、階級構造を複雑にする。人々は分化している諸集団に分属しており、そのおのおのの集団は、かれらのパーソナリティの一部にのみ関係する<sup>53)</sup>。

集団成員の交替は急速であり、成員の間で親しい友人関係をもつことは困難である。多くの都市居住者は部屋を所有していないうえ、一時的な居住は伝統や共同感情を育てないから、温かい隣人

関係は期待できない。人々は都市の全体像について考えることはまずない。このように組織団体から遊離した人間は、集合行動をとる活動的大衆となる<sup>54)</sup>。

しかし、都市は多様な人間を生み出すと同時に平均化の傾向もおしすすめている。

以上、ワースのアーバニズムの理論について述べてきたが、その特性をデュイにしたがって要約すると、①異質性、②非人格的關係、③分業、④匿名性、⑤移動性、⑥断片的役割、⑦階級分化、⑧収奪の關係、⑨時間の厳守、⑩新しい家族關係、⑪コスモポリタニズム、⑫寛容、⑬皮相性、⑭ソフィストケーション、⑮飽きの態度、⑯ステレオタイプ、⑰功利性、⑱公的統制、⑲相互依存、⑳競争<sup>55)</sup>であるが、これはジンメルの強い影響を受けていることが推察される。

ワース理論の特色はアーバニズムの特性の指摘にあるというよりも、アーバニズムの規定要因を明確に提示したところにある。これはすでに示した通りであるが、必ずしも論理的、説得的に展開されているとはいえず、サイズ、密度、異質性の間に重複や繰返しの部分が多い。

しかし重要な点は、ワースが「文化体系」を生態学的な要因によって説明しようとしているところにある。日本でも人口史観は高田保馬にみられるところであるが、デュルケムもこれに近い。ワースの説明は、アーバニズムの人口による決定論と断定することはむずかしいが、いずれにしてもこのような説明は、すでに時代おくれであるといわざるをえない。われわれは文化体系の変化を説明するためには、文化要因を取りあげる必要がある。

ワースはパークの人間生態学から一步前進して、アーバニズムを提唱したが、その規定因子としては依然として生態学的要因を用いているところからみて、やはりシカゴ学派から抜出していないというべきであろう。

49) 同上, 137頁。

50) 同上, 138頁。

51) 同上, 138頁。

52) 同上, 139頁。

53) 同上, 139頁。

54) 同上, 140頁。

55) R. Dewey, "The Rural-Urban Continuum," American Journal of Sociology, 1960, pp. 60-66.



## 〔5〕 ショーバークのワース批判

1920年代に成立したシカゴ学派の伝統は非常に強い影響を学界に与え、都市研究の主流として定着した。生態学的方法や人口・技術のように実態調査の可能なものに重点をおく研究方法は経験主義、実証的方法を尊ぶアメリカ的な学風の所産であった。オスカ・ルイスや W. F. ホワイトのような人たちの実績は、社会解体に対する重要な反証ではあったが、シカゴ学派の全体系に対する組織的、包括的な批判ではなかったため、都市研究は長くシカゴ学派の伝統のもとに生きてきたといえるのである。

### （1） ショーバークのワース批判

このような学問的既存体制にたいして挑戦したのがショーバークの批判であった。シカゴ学派やワースにたいしてショーバークが提起した問題は六つある<sup>56)</sup>。

まず第1点は、すでに指摘したようにシカゴ学派、殊にワースは「都市」を時間を超越したものとして把握している。ところがショーバークのように実際に近代都市と前近代都市とを比較検討すると、両者はまったく異質のものであることがわかる。したがって都市化研究の対象としての都市は、時期的に、あるいは内容的に区別されなければならない。このような見地からショーバークは実際の経験にもとづいて都市を「産業型都市」と「前産業型都市」に分類した。彼の著書『前産業型都市』はこのような意図のもとになされた分類の一つの研究である。彼はこの研究を通して比較研究の必要性を痛感することになったといえる。

第2に、都市の空間的限定の問題である。前近代社会における都市研究に従事したショーバークは、ワースの期待とは違って、同じく都市と呼ばれているものが、洋の東西においてはその内容が著しく異なっていることを知った。すでに述べたようにシカゴ学派の視野は北アメリカ合衆国に限られており、北アメリカの都市の性格はそのまま世界の都市の性格であると信じられており、そもそも疑いをさしはさむ余裕さえもっていなかつ

た。しかしアメリカ以外の、ことに前産業都市の研究がすすむにつれて、このようなアメリカの学者たちの信念があやまった盲信にすぎないことが次第に明らかになってきた。ショーバークの論文“Comparative Urban Sociology”は、このような問題提起として書かれたものである。

第3は理念型分析から変数分析への転換である。ワースはアーバニズムという一つの理念型を用いて分析している。M. ウェバーの理念型分析にみられるように、それは理念型と現実のズレを究明するのに適しているが、それは静態的な分析にとどまっている。動態的あるいは体系的な分析をおこなうためには、いくつかの変数のシステムとしておさえることが必要である。ワースのアーバニズム研究の三重図式が単に研究の視角にとどまっていたのに対して、ショーバークの理論は、都市社会のキイ変数の提示であるから、そこには分析方法の質的な転換がみられる。

第4に、すでに社会解体論のところで述べたように、シカゴ学派は都市を社会解体の場としてとらえ、これを過度に強調しすぎているが、その後の研究が示すように、解体をひきおこすことなく都市化が進行することもあるし、また、スラムの中にさえ強固な組織が存在している。

第5に、これは主にレッドフィールドに向けられたものであるが、ショーバークによれば **folk society** 対 **urban community** の対比は論理的な誤りを犯している。なぜなら **folk society** は全体社会であるのに対して **urban community** は単に部分社会にすぎないからである。**urban** は **rural** と対比されるべき概念である。

最後に生態学的構造としての都市は文化的・社会的制度に影響を受けるサブ・システムであるが、このような都市は権力や教育の焦点であるから、社会変動の中心でもある。したがってこれを独立変数として再編成しようとショーバークは主張する。

### （2） ショーバークの理論的枠組

ショーバークの理論は、四つの独立変数——都市、文化的価値、技術、権力——からなっている<sup>57)</sup>。

まず第一の変数である「都市」はシカゴ学派の

56) この点は、拙著『都市化の社会学』123—125頁でとりあげている。

57) G. Sjöberg, “Comparative Urban Sociology” in K. Merton ed., *Sociology Today*, 1959, pp. 339—356.

都市研究の伝統によって生態学的人口構造を意味している。シカゴ学派の生態学的構造としての都市は、**impersonal competition** と **natural environment** を強調しすぎ、社会的、文化的側面が軽視されているところに問題を残している。ショバークによれば、世界の都市の生態学的パターンを説明するには **biotic view point** はあまり有効な分析方法であるとは思われない。

このような方法が有効であるためには、世界の都市は「文化的価値」、「権力構造」、「技術」の進歩と無関係でなければならないが、そのような都市は現実には存在しない。むしろ都市の生態学的タイプの説明として「都市」を独立変数にすることを認めるが、シカゴ学派の考え方にそのまま追随するわけではない。

都市は政治的組織と権力、公式の教育の中心地であり、また農村以上に公的な統制を受けている。したがってこのような構造的な必須要件をそれぞれの社会において明らかにすることが必要である。このように都市の機能的要件を明らかにし、その中に独立変数としての都市を組入れることが目下の急務である。

第2の変数は文化的価値である。都市社会における文化的価値の果す意義を高く評価する仕事は、シカゴ学派には欠けていた点であるが、これはフェアレーやコルブの研究、さらにモスラム社会における宗教的価値の研究において明確にされた。フェアレーはボストンの中央部の土地利用の実態調査からシカゴ学派の生態学理論、殊にパーゼスの同心円説が事実と反することを実証した。ボストンの都心部に近い（パーゼスの説にしたがえば **zone in transition** にあたり、移動がはげしく、スラムが形成される地域）ところにあるベーコン・ヒルは100年も前から高級住宅地として象徴的な意味をもっている。彼は土地利用において文化的価値の果す意義を実証することによって、シカゴ学派が前提してきた「価値体系、観念、目的は土地利用には影響を及ぼさない」という仮説を完全に否定したわけである。

コルブは彼の論文の中で、都市の社会構造を分析するに際して T. Parsons の **pattern variables** の利用の可能性を示している。

ショバーク自身は『前産業型都市』において、

宗教的価値がいかに大きな役割を果たしているかを示している。

ワースの場合には都市社会研究の三重図式を示したものの、アーバニズムを規定するものが人口の量質であったため、アーバニズム研究に占める価値体系の位置づけはきわめてあいまいなものに終わっている。これと対照的にショバークは価値体系の特質こそが都市の社会関係の相違を説明する要因であることを明確にしている。

第3の変数は技術である。都市社会のなかで「技術」を重視する考えはオグバーンやホーレーの中にみられる。技術の発展が都市の社会構造に与える影響は、都市化・産業化が家族に与える影響として捉えられるとともに、技術と都市社会の型との関係として捉えられる。そこでショバークは、技術的な観点からみて、都市社会の構造的要件として ①大規模な合理的組織、②業績主義による流動的階級構造、③結びつきがさほど強くない家族、④科学や技術を強調する大衆教育、⑤マス・コミュニケーションをあげている。

最後に、都市社会の独立変数として「権力」があげられる。これは三つのレベルが区別される。

- ① 地域社会の権力が都市社会に与える影響
- ② 国家権力によって社会構造や生態構造に与えられる影響
- ③ 国際的レベルとして、例えば、産業化した国の経済力は低開発国の都市成長を刺激することができる。

いうまでもなく「権力」の研究はリンドのミドルタウン、ウォーナーの階層研究、フロイド・ハンター等のコミュニティの勢力構造論の中で発展してきたものである。ショバークは彼らの遺産を自己の理論体系の中に組み入れようと考えている。

彼は以上の四つの変数を用いて都市社会を分析しようとしている。

### (3) ショバーク理論の問題点

以上、述べてきたように、ショバークの都市理論はシカゴ学派の伝統、ことにワースの業績に比較しても飛躍的な進歩を示していることは確かである。しかしながらショバークの都市理論はいまだ未完成であり、多くの問題点をかかえている。

第1は、四つの変数がひき出された論理に関連している。漸新な試みとしての四つの変数は確か

に興味をひくものであるが、重要な点は、いかなる論理によってこれから四つの変数が引き出されてきたかについて説明がほとんどなされていないことである。四つの変数が妥当なものであるか、いかなの以前に、四つの変数の抽出の論理がまず問われなければならない。しかし残念ながらそれにはほとんどふれられていない。

第2に、これに関連して、ショバーク自身が認めているように、四つの変数の水準(order)が違っている。これらの関連をどのように扱うのか十分に説明していない。さらに構造的要素(価値)と機能的次元(権力)との区別あるいは関連についても述べられていない。

第3に、「技術」と「都市」(city)は社会構造の下位構造であることを考えるなら、「価値」と「権力」が社会構造として残るが、これだけで十分であるのかどうかについても疑問が残る。「政治」が変数としてあげられるのであれば「経済」も当然のこととして変数に入れられるべきではなかろうか<sup>58)</sup>。いずれにしても変数の引き出し方についてのシステマチックな説明がないところに問題が残されている。

最後に、ショバークの場合には変数分析であるため、都市化の動的な測定の可能性がひらかれているが、単に四つの変数の提示だけで、測定の仕方は示されていない。変数などのように指標化し、どのようにして測定するのかを示し、それを実証するものでなければ、理念型分析を超えた変数分析とはいえない<sup>59)</sup>。

さらに、すべての要因を変数としておさえ、その組合せで分析することが可能なのだろうか。このような批判にはパレートの変数分析にたいするパーソンズの批判がある。

以上、いくつかの問題点を示したが、要するにショバークはシカゴ学派の伝統に挑戦して、極めてユニークな方向を示したが、その理論はまだ出発点を示しただけで、十分に整備されたわけではない。これらの問題点に答えられたとき、彼の理

論体系はその全容を示すであろう。

## 〔6〕 コックスの現代都市論

### (1) デューイのアーバニズム比較論

ワースのアーバニズム論は各方面に強い影響を与え、これに対する賛否の議論がたたかわされた。特にアーバニズムに関する都鄙連続体説は、ワースやレッドフィールドを起点に多くの論者が参加した。これによって、アーバニズムの規定にも新しい見解が付加されたが、ニューハンプシャー州立大学のデューイ教授はこれらのアーバニズムの規定を整理しながら独自の理論を展開した。その中で彼は、18名の都市学者のアーバニズムに関する規定を40項目にわたってチェックしている<sup>60)</sup>。最もチェックの多いものから5位までを示すと、①異質性(heterogeneity) ②非人格的関係(impersonal relation) ③匿名性(anonymity) ④移動性(mobility) ⑤時間の厳守(emphasis on time)。これによって明らかなように、アメリカの社会学者がアーバニズムの内容として考えているものは、上記の五つであることが理解される。

### (2) アンチ・アーバニズム

ところでこれらのアーバニズムの特性は、シカゴ学派の思考にみられるように、伝統的様式の崩壊と再編成の過程で各種の社会病理現象が生まれるところから、ともすれば否定的にとらえられることが多い。アーバニズムはそのままアーバン・プロブレムを生み出すものであった。このような考え方はいわゆるアンチ・アーバニズムに結びつき、都市文明にたいする嫌悪となって現われる。アメリカには建国以来、アーバニズムとアンチ・アーバニズムの思想的対立があり、これが社会思想の潮流に1つの大きな要因としてからみあいながら現代にいたっている。アンチ・アーバニズムの立場は都市文明を嫌悪し、ムラ社会に強い郷愁をよせている。

しかしわれわれの住んでいるのは、現代の大都

58) ショバークがどのようにして4つの変数を構成したかは、必ずしも明確ではないが、おそらく、前産業型都市の研究からえたものと思われる。前産業型都市では、経済変動がそれほど重要でなかったとしても、産業型都市の分析においては、経済変動は不可欠のものではないか。

59) この点について L. ライスマンの試みは興味深いものである。彼は、都市成長、工業化、中流階級の出現と権力の接近、ナショナリズムの四つに指標をあたえて計量し、類型を作成している。ライスマン星野訳『新しい都市理論』。

60) R. Dewey, "The Rural-Urban Continuum", American Journal of Sociology, 1960, pp. 60-66.

市の中であるから、その条件を無視した論は現実性をもたない。さらにアンチ・アーバニズムの欠点は都市の暗い面のみに注目し、その長所を正当に評価しえないところにある。現代都市の生活の特性をもっと肯定的にとらえることはできないのであろうか。

### (3) コックスの現代都市論

ハーバート大学神学部のH. コックス教授は、1965年に著わした『世俗都市』の中で、現代都市をテクノポリスとしてとらえ、その特性を「匿名性」と「流動性」の2点においてとらえている<sup>61)</sup>。すでにこれまで述べてきたように、匿名性と流動性はともに多くの学者によって指摘されたアーバニズムの顕著な特性であって、そのかぎりにおいて何も新しい指摘ではない。しかし問題は、コックスがこれらの特性をきわめて肯定的にとらえ、これを神学的に基礎づけているところにある。

コックスによると、人々は「流動性」を否定的にとらえがちであるが、これはあやまりであって、流動性は現代社会に必要な条件である。流動性は常に新しい価値を生み出す「社会変動」に密接につながっている。1900年以降、急激に進行した黒人の都市への移動が黒人に社会問題を自覚させ、それが1960年代の公民権運動をひきおこし、今日の状態をかちとることができたといえよう。地理的移動は常に社会的・職業的移動をともなっており、このような移動は高度産業社会には不可欠の条件である<sup>62)</sup>。

「流動性」は神学的・聖書的にみても積極的に受けとめることができるとコックスは主張している。すなわち、キリストの昇天はイエスがどこへでも移動可能なことを示している。また初期のキリスト教徒は“The People of the Way”と呼ばれており、ダンテの「神曲」やバイヤンの「天路歷程」も流動性の価値を示している。そこで流動性は宗教的ロマンチストが考えるような脅威ではなく、信仰の障害でもない<sup>63)</sup>。

都市社会の「匿名性」も否定的に考えられがち

であるが、コックスによると、匿名性は都市人の生活に、はかり知れない恩恵をもたらしている。匿名性なしには現代大都市の中で人間的な生活を営むことはできないとコックスはいう。都市の中の匿名性は生活をおびやかす面より、都市人の自由を保証するのに貢献する面が大きい。都市に住む人間は広い可能性の中から選択する自由をもたなければならないが、そのためには限りなく多い人間接触の中から、あるものを選び、他をすてる「選択」が必要となる。都市人はプライベートな生活と公的な関係を区別しなければならない。匿名性はこのような都会人の選択を可能にする防壁の役割を果している。自分が欲する人とのみ深い人格的な関係をむすび、残りの人とは機能的な関係ですますことを可能にするのは、この匿名性にほかならない。大部分の人に匿名であることが、少数の他の人に人間として相対することを可能にしている<sup>64)</sup>。

さてコックスによると、神学的にみれば、このような匿名性が果す選択の機能は「律法」に対する「福音」に対応しているという。「律法」は世の中の行為の標準であり、選択や自由の必要がないのに対して「福音」は選択と責任を与えられることであり、歴史の中に新しい可能性を創り出していく神の働きであるから、匿名性はこれにかなうものである<sup>65)</sup>。

以上、コックスの都市論はアーバニズムを積極的に肯定し、これを神学的に基礎づけている点に特色がある。ともすれば宗教的ロマンチズムが優勢である神学的思想界にあって、きわめて大胆に現代大都市の特性を積極的に肯定しようとする試みは注目に値するものである。しかしアーバニズムの特質が肯定的に理解されたからといって、そこから問題が生じないということを意味するわけではない。われわれは「匿名性」と「流動性」のマイナス機能をもまた正当に評価し、それに対する対策を慎重に考慮しなければならない。大都市についてはシカゴ学派の考え方と、コックス的

61) H. コックス塩月賢太郎『世俗都市』66頁。

62) 同上、83—90頁。

63) 同上、90—96頁。

64) 同上、67—77頁。

65) 同上、78—82頁。

な観点を同時に持つことが要請されている。

## む す び

これまで都市的生活様式の特質について論じてきたが、最後に、その問題点について述べて、むすびとしよう。

これまでの論述のなかから、都市的生活様式の特質は

- ① 多様性（異質性）
- ② 非人格的關係
- ③ 匿名性
- ④ 流動性

であることが普遍的に承認されていることを知った。さらにこれらの特質はいずれも「近代」が追い求めてきた価値すなわち「自由」の実現の条件であり、結果にほかならない。自由の実現はまず都市的生活様式と結びついておしすすめられていった。要するに、ここで論じたアーバニズムの特質は自由の具体的な現実化にほかならない。

したがってこれらの特質は、都市の偉大さを生み出す根本原因であることはいうまでもない。都市の活動力やエネルギーはアーバニズムの特質によって支えられている。しかし同時に、この特質は社会解体をひきおこし、都市病理を生み出す元凶でもある。人々は地域に関心を失ない、非人格的關係によって欲求を充足するため、他人を深く理解することができず、誤解と敵対が生み出される。

ここで重要なことは、都市の栄光と暗い影が、別の原因によって生み出されるのではなく、アーバニズムの特質という同一の原因によって生み出されるものだという点である。都市は栄光と暗いかげりを併せもつ存在である。したがってわれわれが都市を見る場合、手ばなしで礼讃したり、逆に暗い面だけをみて絶望したりしてはならない。われわれがなしうことは、暗い面をできるだけ最少限におさえることである。

現代都市の特質を評価する場合に、まずなさねばならぬことは、コックスが示したように、これをまず肯定的にとらえることである。これらの特質は現代人の生活を支える条件であるから、これを否定するところに現代人の生活はありえない。われわれは、まずこれを肯定することから出発しなければならない。まずこれを肯定した上で、そこから生まれる、暗い影を可能なかぎり取り除く努力をしなければならない。

社会解体論は、先に述べたように、アメリカでも多くの反証が出され、批判を受けたが、日本ではまた異なった事情がある。すなわちオスカ・ルイスがメキシコで示したように、都市化が進行しても社会解体を示さないことがあり得るわけである。日本では都市化が高度にすすんだ6大都市においても、町内会・自治会は強固にはりめぐらされており、下町では温い交流が頻繁になされている。これらは別の機会に詳しく実証するつもりである。